

長崎県農林技術開発センター

センターニュース

巻頭言 -1-

- 気象災害を乗り越える準備と知恵を
- 表紙の写真(ウンシュウミカンの新品種「長崎果研させぼ1号」)

研究成果 -2-

- 水稲「つや姫」の早期栽培における収量および玄米外観品質に優れる施肥技術
- バレイシヨ「ニシュタカ」の春作マルチ栽培における目標収量を確保できる収穫期の予測
- ショウガ根茎腐敗病に対する種ショウガの温湯消毒法
- 移動式大型スプリンクラー(レインガン)による露地ビワの主要病害虫省力防除
- ビワ「なつたより」の着房率を向上させる7月誘引
- チャの多収性有望品種「きらり31」の特性
- 電気ショッカーを利用した安全かつ効率的な止め刺し技術

研究紹介 -9-

- 低コスト生産を目指した黒毛和種雌牛肥育技術の確立
- いちご、中晩柑の育種の取り組み

成果を訪ねて -10-

- バレイシヨ「さんじゅう丸」の普及について
- いちご「ゆめのか」の普及について

お知らせ -11-

巻頭言



農林技術開発センター
副所長兼果樹・茶
研究部門長

中里 一郎

表紙の
写真

1

○ 気象災害を乗り越える準備と知恵を

雪を被ったミカン、ビワの樹々。ここは雪国かと思うような寒さと一面の銀世界。

去る1月24日から25日にかけて大寒波が襲来し、稀にみる低温と積雪により、各地で被害が発生しました。特にビワ産地では果実の凍死により甚大な被害に見舞われています。被害に遭われた皆さんには心からお見舞いを申し上げます。

今回のような低温に限らず、猛暑や豪雨などの異常気象は、そのたびに農業へ大きな被害をもたらし、自然の力の大きさを思い知らされます。近年、このような極端な気象事例が増えていると感じている方は多いのではないかと思います。長崎市でも最高気温が35℃以上の猛暑日は増え、1日あたり100mm以上の豪雨の日数も増える傾向にあります。

IPCC(地球温暖化の問題を考えるために設立された世界的組織)により取りまとめられた報告書によると、地球の気温は、21世紀末には最大4.8℃上昇する可能性があること、極端な高温や降水などの頻度がより増加することなどが報告されています。温暖化の進行に伴い、こういった極端な気象事例がさらに増えてくるのではないかと懸念されます。今後とも、生産者、関係機関が知恵を出し合って、こういう気象変動にも対応できるよう、日頃から事前の対策を心がけることが必要ではないかと思えます。

当センターとしても、今後予想される温暖化に対応した品種育成や栽培技術の研究を通じて、生産者の所得向上につながるような技術開発を進めていきたいと考えています。

今年産の作物の生産が始まっています。今後は気象災害がなく、実り多い年が続くように期待したいと思います。

○ ウンシュウミカンの新品種「長崎果研させぼ1号」

NEW!!

果樹・茶研究部門カンキツ研究室では、平成12年からウンシュウミカンの品種開発に取り組んできました。この度、平成25年4月に出願していた「長崎果研させぼ1号」が、平成27年9月30日に品種登録されました。

「長崎果研させぼ1号」は、「させぼ温州」の珠心胚から育成した品種で、親品種の「させぼ温州」より成熟期が5日ほど早く、11月下旬にはほぼ完全着色となります。糖度が高く減酸も早いいため、甘味比が高い良食味の品種です。また果頂部突起の発生が「させぼ温州」より少ないため商品化率が高く、生産安定が期待されます。



水稲「つや姫」の早期栽培における収量および玄米外観品質に優れる施肥技術

● 背景・ねらい

高温登熟性に優れ、良食味の極早生品種「つや姫」は、平成23年に本県の奨励品種に採用され、県北・島しょ地域を中心に栽培されています。「つや姫」は基肥を多施用すると、倒伏しやすく品質低下が懸念されることから、収量及び品質に優れる施肥技術を確立しました。



収穫直前の「つや姫」

農産園芸研究部門



主任研究員 大脇 淳一

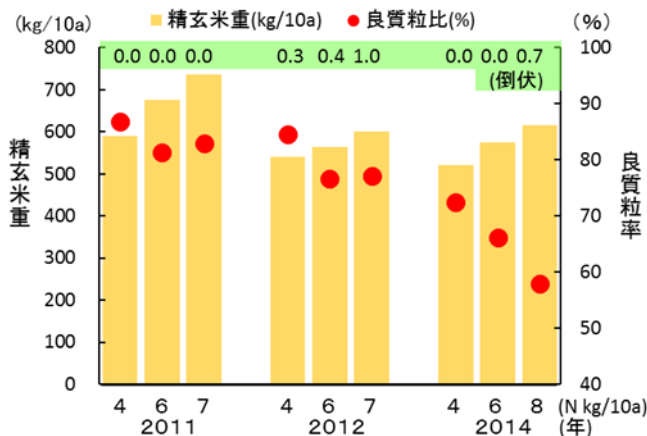


図1 基肥と収量・品質・倒伏

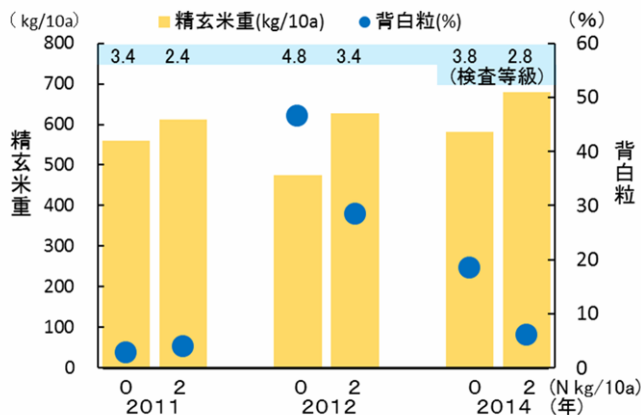


図2 1回目穂肥と収量・背白・品質

● 研究成果

「つや姫」の基肥の施肥量が多くなる程、精玄米重は重くなりますが、良質粒率は低くなります。また、窒素7kgでは倒伏が懸念されることから、6kgが収量及び品質の面で優れています。

1回目穂肥量で、窒素2kg施用すると穂肥を施用しない場合と比べ、精玄米重は重く、背白粒は発生が多い年次でも少なく、検査等級も優れます。

2回目穂肥で窒素2kg施用すると、精玄米重・良質粒率は高くなりますが、窒素4kg施用すると、玄米タンパク値も増加します。

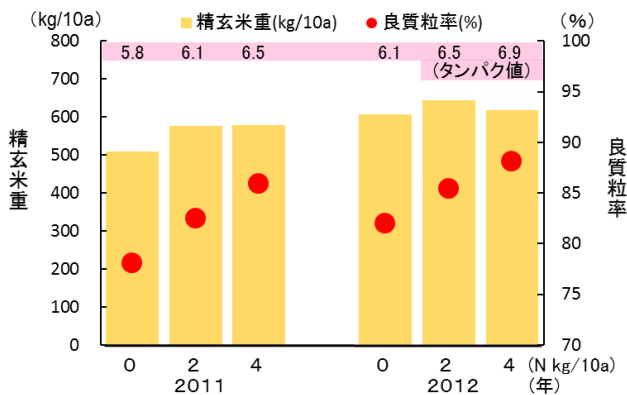


図3 2回目穂肥と収量・品質・玄米タンパク値

以上の結果から、早期水稲「つや姫」の施肥は、10a当たり窒素換算で、基肥6kg-穂肥1回目2kg-穂肥2回目2kgが収量及び品質の面で優れていました。

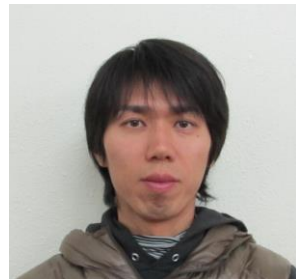
バレイショ春作マルチ栽培における収量予測

農産園芸研究部門 馬鈴薯研究室

● 背景・ねらい

長崎県においてバレイショは主要な農作物で、生産現場では春と秋の二期作栽培が行われており、春作ではマルチ栽培が主要な作型となっています。センターでは、暖地二期作に適した品種の選抜・育成は春・秋作とも普通栽培で行なってきましたが、春作マルチ栽培の普及により、春作の育種の試験については平成14年より普通栽培からマルチ栽培に完全移行しました(写真1)。

そこで、これまでのセンターでの春作マルチ栽培における試験成績(植付時期:1月下旬、施肥量(kg/a):N:P₂O₅:K₂O=1.40;1.12;0.84)をもとに生育・収量性と気象条件との関係について解析し、気象条件から収穫期を予測することが可能か検討しました。



主任研究員 坂本 悠



写真1 春作普通栽培(左)と春作マルチ栽培(右)

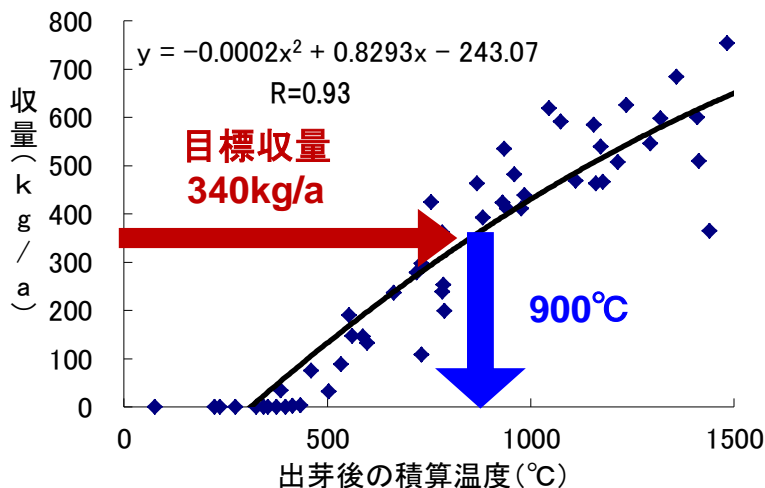


図1 収量と出芽後の積算温度の関係

表1 生育・収量特性と気象要因の相関係数

	茎長	茎葉重	上いも数	収量	1個重	でん粉価
積算温度	0.70**	0.27	0.65**	0.93**	0.72**	0.72**
積算降水量	0.50**	0.33*	0.61**	0.67**	0.39**	0.29
積算日照時間	0.61**	0.26	0.59**	0.87**	0.87**	0.69**

1) **1%水準, *5%水準で有意

● 研究成果

本県の主要品種「ニシユタカ」を用い、生育・収量性と気象条件(出芽期からの積算温度、降水量、日照時間)について回帰分析したところ、表1に示すように、収量と出芽期からの積算温度との相関が最も高いことがわかりました。一方、収量と積算降水量との相関は低くなっており、原因としてマルチを被覆した畦内では土壌水分が安定しているため、降水量に影響されにくいと考えられます。

このことから、出芽期からの積算温度を計算することで、作柄や目標収量を得られる収穫期を予測することが可能となりました。県農林業基準技術における目標収量340kg/aを確保できる積算温度について、図1に示した回帰式を利用して計算すると約900°Cとなります。



ショウガ根茎腐敗病に対する種ショウガの温湯消毒法

● 背景・ねらい

ショウガ根茎腐敗病(写真1)は、本県の露地栽培ショウガ(4月下旬植付け)では6月中旬頃から発生します。本病は、汚染種ショウガ及び汚染土壌により伝染し、いったん発病すると急速に蔓延して大きな被害をもたらす土壌病害です。本病に対して効果が高い臭化メチル剤(植付け前の土壌消毒剤)は、平成4年にオゾン層を破壊する物質に指定され、平成25年に使用できなくなりました。臭化メチル剤を使用せずにショウガの安定生産を確保するためには、代替技術を組み合わせた総合的な対策が必要となりました。そこで、代替技術の一つとして種ショウガの温湯消毒方法の開発に取り組みました。

環境研究部門
病害虫研究室



専門研究員 難波信行

● 研究成果

汚染種ショウガを51.5℃の温湯に10分間浸漬した後、流水で5分間冷却する方法で、根茎腐敗病の発病を抑制(表1)し、生育への影響も認められない(表2)ことが確認できました。処理量は、湯量400ℓの温湯消毒機(写真2)を用いた場合、1回の消毒で約30kg(15kg×2コンテナ:コンテナ重は含まない)、10分間の浸漬処理終了後、浸漬により低下した水温が2分程度で復帰するため、冷却作業中に次の温湯処理にかかれるので1時間に4サイクル(約120kg)の処理が可能です(図1)。



写真1 地上部の立ち枯れと軟化腐敗した根茎

本病を種ショウガで畑に持込まないためには、未発病の畑から採種した種ショウガを確保することが望ましいのですが、健全な種ショウガの確保が難しい場合は本技術が活用できます。

表1 温湯消毒の防除効果

処理区	発病株率(%)		
	2012年	2013年	2014年
温湯処理	0	11	0
無処理	28	25	20

表2 温湯処理後の生育状況(圃場試験:2014年)

処理区	出芽株率(%)	草丈(cm)	根茎重(g/株)
	6月23日	10月10日	10月28日
温湯処理	100	111	1215
無処理	100	111	1268

※ 1 2012年と2013年は圃場試験、2014年はプランター試験で実施した(2013年は前作で根茎腐敗病が少発生した圃場で行ったため試験開始前に土壌消毒を実施)。

※ 種ショウガは採種圃産の購入根茎を使用した。

2 種ショウガは発病圃場から収穫した根茎を使用した。



写真2 温湯消毒機

※ 湯芽工房YS-501M
(株)タイガーカワシマ

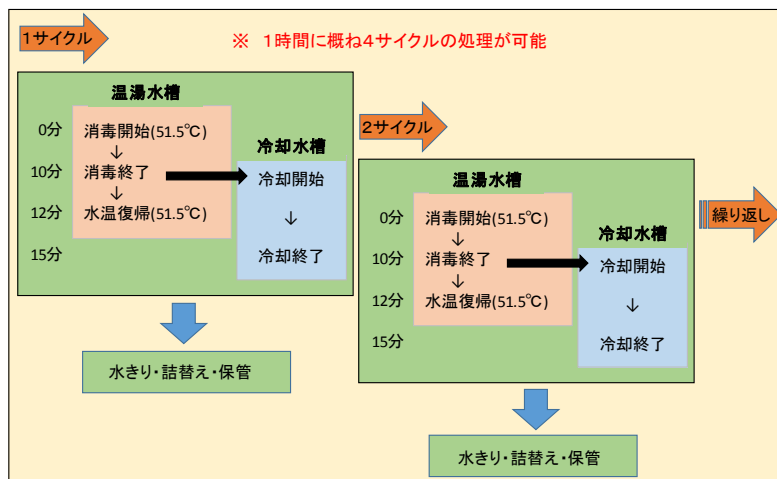


図1 温湯消毒作業の流れ



移動式大型スプリンクラー(レインガン)による露地ビワの主要病害虫省力防除

● 背景・ねらい

県内のビワ産地では、露地ビワを中心に果実腐敗の発生が問題となっています。この病気は、灰斑病菌、炭疽病菌を主体とする糸状菌(カビの一種)が開花時期に感染し、果実の成熟に伴って、果実内部から腐敗が進行することで発生します。

これらへの対策として、開花時期に薬剤散布を複数回行うことが有効ですが、生産者の高齢化や急傾斜園地が多いため、対策が困難な園地が多く存在します。

そこで、愛媛県などでかん水等に利用されている移動式大型スプリンクラー(以下、レインガン)を用い、露地ビワにおける体系防除を実施し、果実腐敗を中心とした主要病害虫に対する防除効果を検討しました。

果樹・茶研究部門
カンキツ研究室



主任研究員 内川 敬介

表1 各防除法におけるビワ主要病害虫に対する防除効果

試験年度	試験区	果実腐敗発生率(%)	灰斑病		たてぼや病		アブラムシ類(頭)	
			発病率(%)	発病度	発病率(%)	発病度	散布前	散布5~7日後
2013	レインガン	28.4	23.0	6.9	0	0	181	0
	動力噴霧機	34.2	24.7	7.4	0	0	197	0
	無防除	41.8	35.4	12.0	5.4	1.1	61	41
2014	レインガン	13.9	10.8	3.1	0.5	0.1	800	0
	動力噴霧機	19.4	8.3	3.5	1.1	0.2	157	0
	無防除	—	45.8	19.2	12	2.9	23	29

- ※ 果実腐敗: 収穫(2014/5/13,6/7,2015/5/27)し、10日後に調査したデータの平均値。
- ※ 灰斑病: 展開新葉を発病度別に調査(2013/10/1,2014/9/18)したデータの平均値。
- ※ たてぼや病: 果実被害を調査(2013/5/31,6/7,2014/5/27)したデータの平均値。
- ※ アブラムシ類: 散布前(2013/7/26,2014/8/14)と散布後(2013/8/2,2014/8/19)に調査。

表2 薬剤散布水量と散布時間

	レインガン	動力噴霧機
平均散布水量/10a(L)	528	265
平均散布時間/10a(分)	1.7	52.5



トラックに搭載したレインガン

- ※ 10aあたりの平均散布水量および散布時間は栽植本数50本/10aとして算出。
- ※ レインガン区は11樹、動力噴霧機区は5樹、無防除区は7樹を供試。
- ※ 2013年、2014年の試験のうち、延べ13回の試験散布における散布水量と散布時間の平均値。

● 研究成果

レインガンでの散布による各病害虫に対する防除効果は無防除と比較して高く、動力噴霧機と比較しても同等～やや高い結果となりました。また、レインガンを用いることで10aあたりの散布水量は動力噴霧機と比較して約2倍となりますが、10aあたりに要する散布時間は、動力噴霧機の53.5分に対し、レインガンは1.7分と大幅な作業時間の短縮となりました。このように、レインガンを用いることで、高い防除効果と省力化の効果が得られます。実際に圃場で使用する際には、適期防除やドリフトに注意する必要があります。



ビワ「なつたより」の着房率を向上させる7月誘引

果樹・茶研究部門
ビワ・落葉果樹研究室

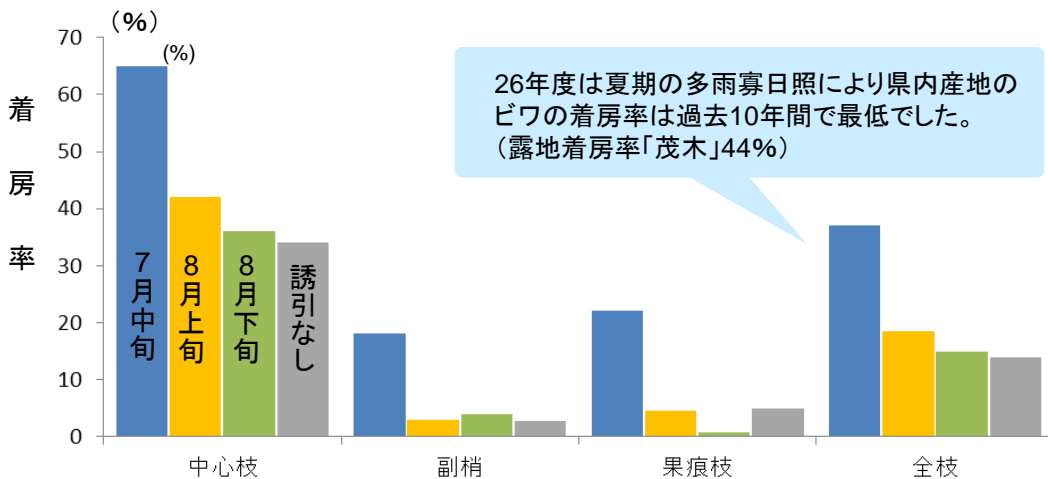
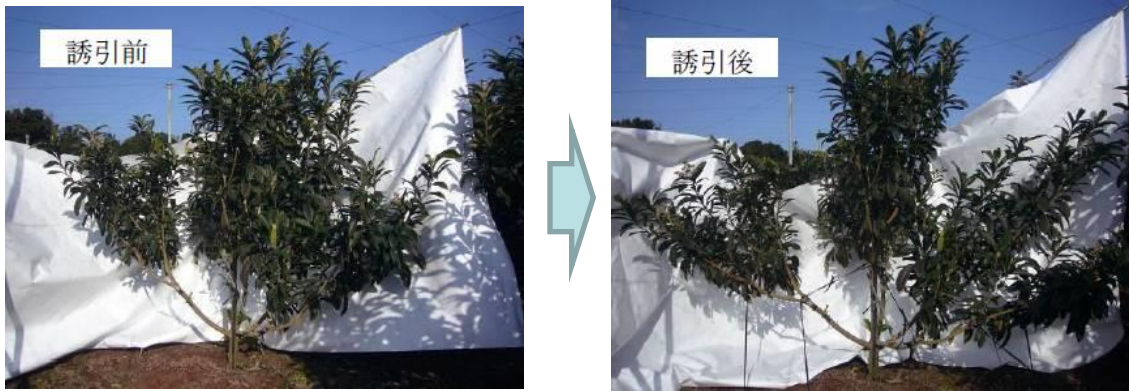


主任研究員 松浦 正

● 背景・ねらい

平成21年2月に品種登録されたビワ「なつたより」は、大玉で糖度が高く食味に優れていることから、市場や消費者の評価も高く、生産量の拡大が期待されています。このような中、樹勢が強く枝伸長も旺盛である「なつたより」は、着房率が従来のビワ「茂木」に比べ低く、栽培に取り組む生産者及び技術者から若齢期の結果枝管理法について対策が求められていました。そこで、収穫後に行う枝の誘引作業の処理時期と着房状況について検討を行いました。

■ 「なつたより」の誘引



26年度は夏期の多雨寡日照により県内産地のビワの着房率は過去10年間で最低でした。
(露地着房率「茂木」44%)

■ 誘引時期の違いとビワ「なつたより」の結果枝別着房率(平成26年度)

● 研究成果

7月に誘引することで、「なつたより」の着房率は、誘引無処理区や9月および8月誘引区に比べ、高くなりました。枝の誘引は収穫後に発生する新梢が展葉硬化してから実施してください。

なお、苗木定植当年から定植翌年夏期までは、支柱に枝を結束し枝の伸長を促すことが重要です。枝を誘引する場合は、定植翌年夏期に分岐部の損傷(枝裂け)が発生しないように丁寧に行ってください。



チャの多収性品種「きらり31」の特性

● 背景・ねらい

長崎県内での茶栽培面積は751haで、その内77%を「やぶきた」が占めています。この品種は、旨味と渋味のバランスがとれ総合的に優れていますが、生産現場では偏った品種構成のため、摘採時期の集中や茶樹の老木化による収量、品質の低下が問題となっています。このため県では他の優良品種への改植を推進しているところです。

ここでは「やぶきた」に替わる有望品種として、注目している「きらり31」の品種特性について紹介します。「きらり31」は、耐寒性が強く色沢が優れる「さきみどり」を母親に、早生で旨味が強く製茶品質が優れる「さえみどり」を父親として、宮崎県総合農業試験場茶業支場で交配、育成されたものです。当センター茶業研究室において平成18年から7年間、適応性検定試験を行った結果について紹介します。

果樹・茶研究部門 茶業研究室



主任研究員 池下 一豊



写真 「きらり31」一番茶相(提供:宮崎茶支)

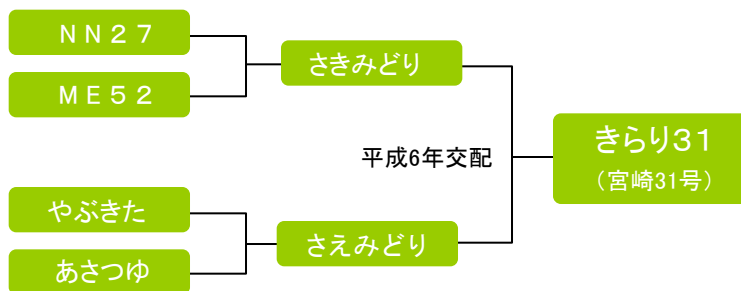


図 「きらり31」育成系統図

表 「きらり31」の一番茶の生葉収量と茶成分・品質

年	品種名	生葉収量 (kg/10a)	アミノ酸 (D.B.%)	タンニン (D.B.%)	茶品質 (注1)	摘採日 (月/日)	出開度 (%)
2010	きらり31	115	5.4	12.6	36.5	4/30	13
	やぶきた	180	4.2	13.0	34.0	5/5	31
2011	きらり31	373	4.1	13.4	37.5	5/16	28
	やぶきた	214	3.0	15.2	34.5	5/18	52
2012	きらり31	414	4.3	12.8	38.5	5/4	57
	やぶきた	247	3.8	14.3	35.0	5/6	65

注1) 茶品質: 形状、色沢、香氣、水色、滋味の各項目10点、計50点満点で評価。

注2) 2010年一番茶収量が少ないのは、摘採日と出開度を考慮すると、2~3日早摘みであったためである。

注3) 成分分析は、近赤外分光法[茶成分分析計(GT-8S)、静岡製機(株)]を用いた

注4) 製茶は、2kg小型製茶機(カワサキ機工製)を用いて行った。

● 研究成果

品種特性としては、摘採適期が「やぶきた」より2~3日早く、やや早生の品種です。樹姿は中間型で株張りが旺盛で幼木時の仕立ては容易です。また、「やぶきた」と比べて、収量、茶品質が優れ、アミノ酸が多く、タンニンが少なく、色沢、香り、水色、味等、総合的に優れる品種です。栽培上の注意点は、輪斑病には抵抗性がありますが、炭疽病には「やぶきた」と同等で弱いので防除が必要です。

「きらり31」は、やや早生種ではありますが、耐寒性に優れるので、防霜施設が整っている県下の茶産地で栽培が可能です。



電気ショッカーを利用した安全かつ効率的な止め刺し技術

● 背景・ねらい

本県では、全国1位となる年間3万～4万頭のイノシシが捕獲されています。そのほとんどが被害対策を目的とした有害鳥獣捕獲で実施され、箱わなによる捕獲が全体の9割以上を占めています。農作物に大きな被害を及ぼしているイノシシの捕獲作業は、危険が伴うとともに、精神的な苦痛も生じます。

そこで、当センターでは、電気柵開発メーカーや狩具開発メーカーと共同で、安全かつ効率的な止め刺し技術の実証を行いました。

研究企画部門 研究企画室



係長 平田 滋樹

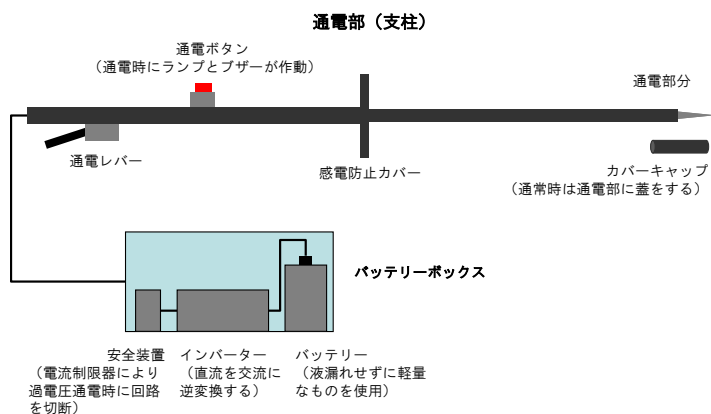


図1 電気止め刺し器の概要図

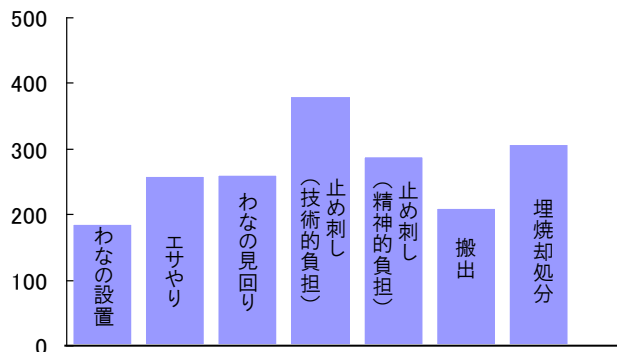


図2 野生動物捕獲に係る従事者の負担アンケート
※回答数 1,311件、複数選択可



図3 電気止め刺し器の使用イメージ



写真 電気ショックにより麻痺したイノシシ
(失神状態で心臓は動いた状態)

● 研究成果

交流電源を用いた電気ショッカーを試作し、現地実証から得られた意見を参考に改良を行い、イノシシを安全に止め刺しできる機材を企業と共同で開発しました。この電気止め刺し器は、電気ショックの通電時間を調整することで、イノシシ等の動きを麻痺させる効果と止め刺しする効果があり、かつ捕獲個体の出血を伴いません。このことから、安全に捕獲ができるだけでなく、捕獲従事者の精神的苦痛が少ない方法です。

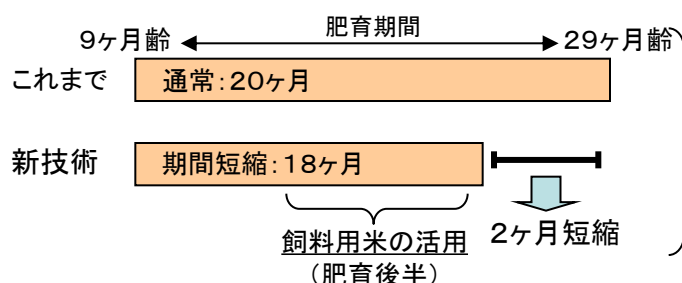
低コスト生産を目指した黒毛和種雌牛肥育技術の確立

● 背景・ねらい

近年、肥育素牛である子牛の価格は上昇しており、肉用牛肥育農家の経営を圧迫しています。県内の肥育農家は去勢牛肥育が主体であり（県内肥育頭数の約70%）、雌牛肥育については去勢肥育に比べ素牛価格が安いメリットがあるものの、枝肉重量が小さく肥育期間が長いというデメリットがあることから、取組農家が少ない現状にあります。

一方、国産飼料による自給率向上は喫緊の課題となっており、全国的に飼料用米の活用が推進されていますが、県内の肉用牛肥育ではその利用がまだ進んでいません。

そこで本研究では、雌牛肥育における肥育期間の短縮や飼料用米の活用による低コスト生産技術の確立を目的としています。



本研究の目標

- 雌牛肥育期間短縮技術の確立
- 飼料用米給与技術の確立

いちご、中晩柑の育種の取り組み

● 背景・ねらい

当センターでは、生産現場等からの要望を受け、27年度からイチゴと中晩柑の育種に着手しました。

いちごの育種目標は、「ゆめのか」以上に多収であること、糖と酸のバランスがとれた良食味であること、遠隔地トラック輸送に耐える果皮強度を有することを柱としていますが、それを踏まえたうえで消費者にアピールできる長崎らしさを持った品種の育成を目指します。27年度は、新品種育成に必要な母本の収集を行い、他県から17品種の分譲を受けています。また、母本の保存や増殖、交配種子から育てた実生苗を育苗する施設を整備し、3月には本格的な交配を行います。なお、品種登録出願は、平成37年度を目指しています。

中晩柑の育種は、高品質な果実の生産による所得向上や温暖化の対応、労力分散などの背景から27年度より取り組むこととなりました。中晩柑は種類が多様で、目的に応じた親を交配することで、時代や消費に合った新しい形質を持つカンキツを育成できる可能性があります。消費者には、外観・食味に優れ、買いたくなる・何度でも食べたくなる、生産者には、安定多収で作りやすい、などの特徴を兼ね備えた「長崎県の新なたんぽぽ」となるような中晩柑が15年後に誕生することを目指し、品種育成を行っています。



写真 イチゴの花粉採取



写真 中晩柑の交配

バレイショ「さんじゅう丸」の普及について

平成22年5月に品種登録出願し、平成24年7月に品種登録となったバレイショ「さんじゅう丸」のその後について追跡調査を行いました。「さんじゅう丸」は、平成21年度に「そうか病に強い暖地向けバレイショ新品種候補系統「西海30号」として育成されました。「さんじゅう丸」は、そうか病に強く、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性を有し、「ニシユタカ」並の多収である特徴を持ち、平成23年の秋作から産地で栽培が始まりました。



●普及状況

「さんじゅう丸」の作付面積の目標は、種いもの生産を急激に増やすことができないことから、県内バレイショ面積の5%、200haとしていました。県内市町の調査によると、平成26年度の作付面積は118haとなり順調に伸びています。産地の中でも、そうか病やシストセンチュウに対する抵抗性が評価されており、今後も有機栽培や減農薬栽培、病気の多発圃場での普及拡大が期待されています。

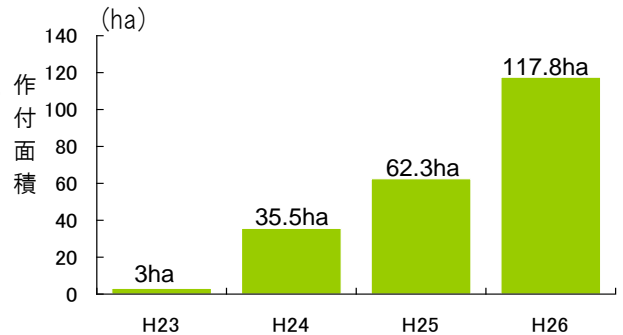


図 「さんじゅう丸」の作付面積

一方、普及拡大に伴い、一期作産種いもを用いた春作マルチ栽培では、収量がやや低くなることや収穫時の腐敗発生が課題となっていました。そこで、当センターでは、増収および腐敗抑制が可能となる収穫時期やマルチ資材の選択等で解決する技術を成果として公表していますので活用ください。

いちご「ゆめのか」の普及について

イチゴの主力品種であった「さちのか」の収量が伸び悩み、経営が不安定になっていたことから、「さちのか」に替わる有望品種の導入が求められていました。そのような中で、愛知県育成の「ゆめのか」は大果・多収で輸送性に優れる品種であり、次期の主力品種として有望視されたので、長崎県における栽培技術の開発に取り組みました。「ゆめのか」は元々、花芽分化が遅く、年内収量の確保には収穫期の早進が課題であったため、当センターで暗黒低温処理による早進技術を開発し、普及に移しました。

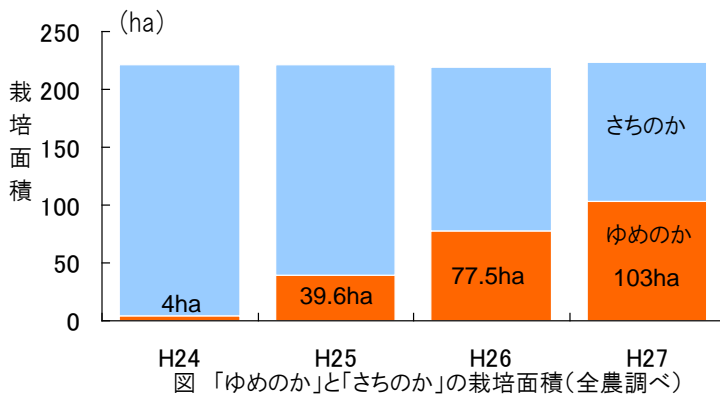


図 「ゆめのか」と「さちのか」の栽培面積(全農調べ)
※数字は「ゆめのか」の栽培面積

●普及状況

「ゆめのか」の平成27年の栽培面積は、103haとなっており、系統扱いの中では、シェア46%と順調に拡大しています。品種の特徴である収量は「さちのか」と比べ、25%ほど多く、販売金額も10a当たりで100万円近く高くなり、500万円/10aを超えた販売実績となる産地もあります。今後も、「さちのか」から「ゆめのか」への転換が進むものと考えています。

当センターでは、長崎県における「ゆめのか」の安定生産技術として、花芽分化促進や栽植密度、最適施肥量などの研究成果もとりまとめているので生産現場で活用ください。

成 果 報 告

獣害被害防止技術研究成果発表会が開催されました。

1月29日(金)に東彼杵町総合文化ホールにて獣害被害防止対策技術研究成果発表会を開催し、県内外の250名が参加され会場はほぼ満席状態となりました。

発表会は、「ICT技術を用いたシカ、イノシシ、サルの防除、捕獲、処理一貫体系技術の実証」の研究成果として、遠隔操作可能な捕獲檻や、捕獲したイノシシ等を簡易に補ていし、殺処分できる電気止めさし器など、成果発表や各種機器の展示が行われました。獣害被害防止に携わる方々から鋭い質問があり、活発な意見交換ができました。今後の被害対策の強化につながることを期待されます。



成果発表会の状況



展示された捕獲檻と移動式簡易捕定容器

農産園芸研究部門の研究成果報告会が開催されました。

1月20日(水)に佐々町にて農産園芸研究部門の研究成果報告会を開催しました。会場には農業関係者が多数出席し、イチゴ「ゆめのか」の生産安定技術やパレイショ新品種「ながさき黄金」の特徴などを報告し、内容への質問も多数寄せられました。いただいた意見については、今後の研究課題の立案等に活用します。

**ながさき実り・恵みの感謝祭に出展しました。**

1月23日(土)長崎市水辺の森公園三角広場およびJA会館にて「ながさき実り・恵みの感謝祭」が開催されました。農林技術開発センターからは、今年度品種登録となったばれいしょ「ながさき黄金」のポテチップスの試食や、アシストスーツの展示などを行いました。当日は、気温が低く午後には雪もちらついていたなか、ご来場いただきありがとうございます。当センターでは今後もこのような研究成果の広報活動に力を入れていきます。



イ ベ ント